様式3

学 校 番 号 61

令和　5年度　学校評価書　（計画段階・実施段階）

福岡県立　小郡高等学校

自己評価

学 校 運 営 計 画（4月）			評 価（総 合）
学校運営方針	明るく豊かな心と英知に富み、たくましい精神力と強靭な体力をもとに、力強く生き抜く意志と意欲をもつ若人の育成を目指す。		A
昨年度の成果と課題	年 度 重 点 目 標	具 体 的 目 標	
今年度迎える創立40周年を本校の発展するよい契機ととらえ、主体的に生き生きと夢や目標に向かって積極的に踏み出す生徒を応援し育成する。特に、英語イマ―ジョン教育や総合的な探究の時間を活用したOGR（Ogori Global Research）の取組等の体験型の活動を展開するだけでなく、運動会や文化祭等、学校行事においても「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性」を培う調和のとれた教育活動を推進する。昨年度も重点的に取り組んだ、生徒の自己肯定感を高め、生徒一人一人の心の寄り沿う指導を今年度はすべての教育活動において浸透させる。 今年度のスローガンを生徒一人一人が自身の夢に向かって一歩踏み出す、そして本校が新たに歴史を築いていくという願いを込め「Find your own way！ ～If you can dream it, you can do it～」とし、自らの手で未来を切り拓き、激動の未来を生き抜くたくましい生徒の育成を目指す。	「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性」を培う調和のとれた教育活動を推進するために、授業改善、観点別評価よる指導や学びの質の向上のためICTの積極的活用を推進する。	「グローバル人材育成強化校」として、英語イマージョン教育を推進し、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力や協調性、能論理的思考力・判断力及び表現力を育み、文化、価値を乗り越えて新しい価値を創造するグローバルに活躍できる力を持った人材の育成を図る。	
		観点別評価による指導の改善を図り、生徒一人一人の多様な個性を伸ばす学習指導を実践する。指導と評価の一体化を図り、生徒の意欲やチャレンジを引き出し、確かな学力の育成・定着と自立的学習態度を養う。	
		共感的な生徒理解と自分らしさを生かせる活動の場所づくりを図り、集団生活を営む上での自己管理能力の育成とともに、学習習慣の確立を図る。学校内での望ましい人間関係を形成し、いじめや不登校のない学校生活の実現を目指す。	
		「文武不岐」の精神のもと、部活動への積極的な加入を促すとともに活動内容の充実を図り、心身の調和のとれた発達を促す。	
	「在り方生き方」について考えるキャリア教育を推進するため、高い志をもたせるとともに困難な目標や課題を生徒個々に設定させ、自己の可能性を伸ばすことで、希望進路を実現させる。	3年間を見通した進路指導計画やポートフォリオの活用で、各学年の目標と考査・各種試験やガイダンス等を学年指導や教科指導とより密接に連動させることで、生徒の希望進路の実現を図る。	
		OGR（Ogori Global Research）プロジェクトの充実を図り、「総合的な探究の時間」を活用する などこれまで以上に、より体験型で発展的な活動を展開する。このことをとおして、課題発見力、計画力、創造力などの「考え抜く力（シンキング）」を育成する。	
	同窓会や後援会との連携による知的チャレンジ・ボランティアへの取組を強化し、学校内外の体育的・文化的な活動を通じて主体性や積極性を育成する。	学習活動や各種行事をはじめ、日常の様々な場面において、「考え抜く力」、「チームで働く力」「チームで働く力（チームワーク）」を念頭に育成する場を設定し、社会で生きていく上で必要な基礎的力を育成する。	
		部活動・生徒会活動・ボランティア活動への積極的な活動を促して、経験・体験を通じ豊かな心をはぐくむ教育を推進し、感受性や発信力など、「確かな学力」の中心になる「しなやかな心の力」を育てることを目指す。	
		自他を大切にする心を養い、いじめ等のない安心して学べる環境を構築する。	
	地域の期待に応え、本校のビジョンを保護者や地域の方々と共有し、「社会に開かれた教育課程」「地域と共にある学校」の実現に努める。	校務運営委員会を学校運営の核とし、諸会議を通じ、学校運営方針を具現化する。また、職員の能力と意欲を発揮できる魅力ある職場づくりを目指して、働き方改革を推進する。	
		教育支援システム等の活用をはじめ、ICT活用指導力の向上を推進し、これまでの教育実践と ICT 活用のベストミックスを図ることにより、「個別最適な学び」を実践する。	
		自他の生命や健康・安全を尊重する態度を養うとともに、防災教育を通して、地域の、災害・社会の特性の知識を備え、自然災害から身を守り、被災した場合でもその後の生活を乗り切る能力や. 他の人々や地域の安全を支えることができる能力、安全・安心な社会を構築する能力を育成する。	
		SNS等やホームページ等を用いて教育活動をきめ細かに恒常的に発信し、本校教育活動の理解や信頼と期待を高めるように実践する。特に、中学校訪問や進路相談事業等において全職員による組織的な広報活動を展開することで、本校の教育方針の周知に努める。	

学校関係者評価

評 価（総 合）	
A	自己評価は A ： 適切である B ： 概ね適切である C ： やや適切である D ： 不適切である （1）創立40周年記念の様々な取組が生徒会を中心とした生徒の主体的な活動につながった。記念音楽祭や、記念招待試合のような新しい企画においては生徒の企画・運営能力が発揮された。 （2）各行事が地域住民が学校を知る貴重な機会となり、義援金贈呈などの、地域貢献も顕著であった。 （3）学校行事以外の授業や総合的な探究の時間においても、生徒の主体的な活動の場が多く設定されていた。 （4）ICT教育の充実が十分に図られている。 （5）「社会に出てから本当に役に立つための教育」のあり方が時代とともに変わっており、当然のごとく教員の指導のあり方も変わっていかなければならない。その変化にうまく対応できている。 以上の理由から適切な自己評価がなされていると評価できる。

評価項目	具体的目標	具 体 的 方 策	評価（3月）			次年度の主な課題	項目ごとの評価	学校関係者評価委員会からの意見
学習指導	観点別評価による調和のとれた教育活動の推進と授業改善、指導と評価の一体化の推進	「確かな学力」の向上を目指した日頃の授業内容・定期考査の改善・充実を図る。	A	A	A	次年度において3学年すべて新課程となり、これまで取り組んできた「指導と評価の一体化」をさらに授業改善を含めて進めていく必要がある。生徒がより主体的に学習に取り組む姿勢を高め、具体的な目標のもとに学力を向上させる手だてをこれまで以上に仕掛けたい。また、リアテンダントも含めた様々なシステムについても、これまでの状況を検証し、より効果的な学習指導が行えるように条件整備に心がけたい。	A	・自動採点システムリアテンダントの活用や、授業におけるタブレットの活用が進んでおり、授業改善による学力向上がなされていると評価できる。 ・英語イマージョン教育の具体的な効果については、本評価書により明確に記述すべきである。 ・次年度の主な課題として挙げられているように、英語イマージョン教育を他の教育活動と有機的な関わりをもたせ、広報活動や地域貢献にもつなげていけるとよいであろう。
		「自主的に学習に取り組む態度」をさらに伸ばすための指導法、評価をさらに充実させる。	B					
		指導と評価の一体化を確立し、観点別評価との関連を生徒・保護者への周知を徹底する。	A					
	ICTの積極的活用による生徒の自発的な学習やチャレンジ精神を引き出す学習指導の確立	ChomeBookその他のICT機器の授業への活用等、研修部と連携して全体の授業力の向上を図る。	A	A		授業におけるICT機器の活用については、タブレットの配付に伴って飛躍的に向上したと考えるが、具体的に生徒の学力を伸ばすための活用に関しては、まだまだ改善・工夫の余地があると考えている。次年度に関しては、定期考査のあり方、改善に向けた検討も必要であろう。生徒が日常的に学習に取り組み、さらに確かな学力を身に着けさせるための取り組みを向上させ、具体的な成果を上げたいと考えている。		
		学習指導の改善を目指し、生徒が自分で考え学習する力や自主的に学習に向かう態度を育成する。	A					
		小テストや課題を活用し、学習時間調査等による分析を徹底し、自主的な学習の量を増やす。	B					
	グローバル人材育成強化校としての特色ある学習指導の工夫・改善による学習指導の強化	英語イマージョン授業における授業のスキルを他の授業でも活用できるような環境を整える。	A	B		6年目となる英語イマージョン教育が各方面に良い影響を及ぼしていることは疑う余地もないが、地域や小中学校、大学その他の連携も含めた学校の教育活動全体の効果的な実施については、まだまだ改善が必要である。様々な取り組みがいわば単発的に行われており、相乗効果的な効果を出せていない。今後は様々な学習活動の関連性や相互の影響について、計画段階から想定して取り組む必要がある。		
		地域や外部の人的資源を活用し相互に連携した「地域とともにある学校」を目指す。	B					
		小中高連携・高大連携等の接続教育をさらに進め、効果的な学習指導の方法について検討する。	B					
生徒指導	生徒の自己指導能力や主体的に行動する姿勢の育成	基本的生活習慣（時間厳守、容儀、挨拶や言葉遣い）の育成や実践力の育成を図る。	B	B	A	昨年度から校則を大幅に見直したことに伴い、場に応じて自ら考えて行動する力の育成に指導方針をシフトして取り組んできた。定期的な風紀検査を実施しない状況で、外部からの苦情が減少したことを考慮すると一定の成果があったと思われるが、服装や頭髪の乱れが散見される状況にあり、生徒会役員の協力も得ながら継続して指導し、生徒が自ら考えて行動する基盤を構築していく必要がある。	A	・校則の見直しを、生徒の自律的活動を促進する大きな機会と捉え、学校の教育活動全般において、自ら考え、行動するできるように、生徒を「指導する」のではなく「支援」する考え方に転換したことは、勇気と決意を要することであり、評価できる。
		主体的に校則を遵守し、状況に応じた身だしなみや立ち振る舞いができる行動力を育成する。	B					
		情報モラルを含めた携帯電話やSNS等の活用について、継続して指導する。	B					
	学校安全の充実を図るとともに、安全に対する生徒の意識の向上や実践力の育成	学校いじめ防止基本方針に基づいたいじめ防止の取組を実践し、保健環境課と連携して未然防止や早期発見、迅速な対応に努める。	A	A		各学年の協力により、学校いじめ防止基本方針に基づき、いじめ防止委員会を中心に組織的に対応することができた。その一方で、年2回のいじめ防止講話を実施しているにも関わらず、いじめの認知があったことを受け、これまで本校職員が担当していたいじめ防止講話の在り方を見直し、外部講師を招聘するなどより効果的な内容に向けて検討していく。また、生徒の状況に応じて、規範意識育成学習の充実を図る。		
		外部講師を積極的に活用するなど、規範意識育成学習の充実を図る。	A					
		交通事故等の未然防止に加え、乗車マナーを含む公衆マナーの指導を行う。	A					
	生徒会活動の活性化や豊かな人間性、部活動生を中心とするリーダーシップの育成	新体制のもと、これまでの生徒会活動を踏襲しつつ、学校行事等を通して創造力や主体性の伸長を図り、生徒会活動の活性化を図る。	A	A		生徒会活動については、これまでの指導から支援に転換して行ってきたが、学校行事を中心に生徒会役員がこれまで以上に主体的に運営に携わり、大いにその成果が見られた。今後も支援体制を継続し、一層主体的に取り組む体制を構築していく。外部ボランティアについては、案内したものすべてにおいて募集人数を超える応募があり、積極的に参加する生徒が増加している。今後も生徒に案内し、積極的な参加を呼びかけ、これらの機会を通して人間性の育成を図る。		
		行事を中心とする様々な活動を通して部活動生のリーダーシップを育成し、部活動全体の活性化を目指す。	B					
		ボランティア活動への参加を促し、多様な体験を通して豊かな人間性の育成を図る。	A					

進路指導	生徒に高い志を持たせその実現に必要なキャリアデザイン構築への推進	ICTツールを活用し、各分掌・学年と連携して、生徒自ら計画を立て学ぼうとする姿勢を伸ばす。	B	B	A	4月全学年に自己管理能力育成オリエンテーションを行い、Classiの活用方法を紹介した。さらにスケジュール管理、学習時間の記録等の声掛け・確認をして活用の習慣化を意識づけさせたい。進路ガイダンスや校外活動プログラムを通じて生徒の教科の学習への興味や理解が深まり、さらに進路意識の向上を図っていきたい。何を考えたのか、さらにどのような課題が生まれてきたのかなどを振り返りを徹底させたい。	A	・キャリア教育を考えると、それは「学び続ける」人を育てることである。社会人になってからも学び続けなければ人の役には立てないことを伝えてほしい。また、身に付けた能力を何のために使うのか、という視点を持たせてほしい。 ・Classiの活用が定着している。生徒の自己管理ツールとしてさらに活用し、自己の活動の記録（ポートフォリオ）を大学入試で活用できるように工夫と創造を継続していただきたい。 ・総合的な探究の時間（OGRプロジェクト）については、小郡市についてのテーマやSDG’s等のテーマにこだわり過ぎず、生徒に身近なことを掘り下げさせてもよいのではないか。 ・令和6年度進学実績は、3年生が1クラス少ないにも関わらず健闘している。合格率が上がっていること、国公立大学の総合型選抜等で合格していることを広報活動においてアピールしてほしい。
		進路ガイダンスを通し生徒のキャリアデザインの基礎を構築する。	A					
		生徒向けの校外活動プログラムを周知徹底し、積極的な参加を促す。	B					
	OGR(Ogori Global Research)プロジェクトにおける深い探究活動を通しての考え抜く力の育成	1年（社会を知る）：課題研究の基礎を学び、地域の課題に取り組み、質疑応答を取り入れた発表る力の基礎を身につける。	A	A		課題としては、生徒たちがただ単にやらされているだけになっている、時間が足りない、ありきたりのアイディアしかでてこないなどがあげられる。それらの課題に向けては学校から外に出て、実地で体験したり、専門家から助言を受けることがより有効であると考える。よって、近隣の大学、企業、役所等と連携を図っていきたい。具体的には、探究課題の見つけ方等についての講演、インタビューに答えてもらう、論文について助言してもらう、発表会に参加してもらいフィードバックしてもらうなどを検討していきたい。		
		2年（世界を知る）：SDG’sや生徒が探究したいもので課題を設定し教科横断的に探究活動に取り組む。またその成果を発表することで、分かりやすくまとめ表現する力を身につける。	A					
		3年（未来につなぐ）：入試研究や志願理由書作成に加え、進路ガイダンスを充実させることで自己の在り方生き方に関わる探究を深め、進路目標実現に主体的に取り組む態度を確立させる。	B					
	模擬試験等の活用による希望進路実現に向けた事前事後指導の徹底	模擬試験に向けたPDCAサイクルを確立させ、生徒に具体的な学習における目標を持たせる。	A	A		今年度から模試対策のセミナーを実施している。7月模試に向けてのセミナーは大雨のため2回実施できなかった。そのような時のための代替を考える必要がある。また模試に向けて意識して学習する→模試で得点できる→学習に対するモチベーションが高まるといったサイクルをさらに徹底していく工夫が必要であると考える。Classiの学習トレーニングから問題を配信していき、生徒たちが目標を設定して、その課題を解いてくことを徹底していきたい。		
		結果を含む様々なデータを活用し、きめ細やかなキャリアカウンセリングを行う。	A					
		生徒の進路希望実現に向けたセミナーの設定と学力を最大限に伸ばす指導を行う。	A					
第1学年	学習や行事、課外活動に対して主体的に取り組む態度の育成	授業の中で生徒同士が話し合ったり、自分の考えを述べたりする場面を全ての教科で増やす。また、生徒自身が選んで学習できる機会を増やすことで、学習指導の個別化を進める。	A	A	A	授業で話し合いの場面を多く設定したり、修学旅行の計画を職員だけでなく生徒も一緒に行ったりするなど、自分の意見を述べたり、複数の意見をまとめる機会を多く設けることができた。その成果もあり、プレゼンテーション能力は大きく向上している。課外活動への参加については、活動の意義について話をしたことで、多くの生徒が自発的にボランティア等に参加した。まだ参加できていない生徒もいるので、引き続き声をかけていきたい。	A	・1学年時から計画的に、対話的学びやプレゼンテーション能力の向上に取り組んでいる点は評価できる。 ・「一人一役」、リーダー育成のための体験活動や、ビブリオバトルの企画など、学年として一人一人の育成を図っている点が評価できる。 ・「本気でしているとたいていのことはできる。本気でしていると何事も楽しくなる。本気でしていると必ず誰かが助けてくれる」ことを体験しながら進んでいる。1学年団の努力を評価する。
		修学旅行の計画を生徒と職員が共同して行うことで、学校行事は生徒が創り上げるものであるという意識を持たせ、その他の行事に対しても主体的に取り組むことができるようにする。	A					
		部活動だけではなく、様々なボランティアやコンクール、コンテストなどの情報を積極的に収集して生徒に提示することで、課外活動への自発的な参加を促す。	A					
	地域に貢献することができる人材の育成および国際的に活躍できる人材の育成	総合的な探究の時間では、実際に地域の方々と接する機会を設け、地元の魅力を再発見し、地域をより活性化したいという気持ちを育む。	B	B		総合的な探究では、話し合いやクロムブックを活用した調べ学習はよくできていたが、実際に地域の方々と意見を交わしたり、現地調査を行う機会が少なかった。英語でのHR連絡は年間を通して実施することができた。まだ、「慣れる」段階であり「実用」までは時間がかかると思われるが、継続していきたい。進路指導については、年間を通して「なりたい自分」について考え、職員もその思いに寄り添って進路を考えることができた。		
		日々のHRでの連絡事項や黒板に書く日付等、英語の授業以外の日常生活で英語に触れる機会を多く作り、英語で日常会話ができるようにする。	B					
		個人面談を通して、偏差値や自宅からの距離ではなく、自分がやりたいことが実現できる進路はどこかについて共に考え、それを実現するために必要なことを生徒と教員で共有する。	A					
	自らの長所を生かし、リーダーとして活躍できる人材の育成	従来の委員会活動を基本に、学年独自の仕事内容を追加したり、新たな係りを新設したりして、全ての生徒が前期・後期を通して、学校や学年、クラスに貢献できる機会を設ける。	A	A		前期・後期を通して、生徒一人一人に役割を与えることで、生徒に様々な経験をさせることができた。グループでの話し合いは、日頃から多く実施されていることもあり、苦手意識が強くなっている生徒が出てきている。それにより、リーダーシップを発揮する生徒が固定化されつつあるので、こちらが計画的に役割を与える機会を作りたい。ブックトークについては、ビブリオバトルとして実施し、定期的に図書館での終礼を行い、本を読む機会をつくることができた。		
		授業中のグループでの話し合いでは、グループリーダーを毎回ランダムで決定するなどして、全ての生徒がリーダーを経験する場面を設ける。	B					
		ｸﾞﾙｰﾌﾟﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝなどを継続して行い、自分の考えを堂々と述べる力を身に付ける。また、幅広い知識を獲得したり、表現力、読解力を育成したりするために、定期的に短時間のﾌﾞｯｸﾄｰｸを行う。	A					

第2学年	基本的生活習慣を土台に、計画性を持って目標に向かう「忍耐力」の育成	健康の保持増進や規則正しい生活を送るなど、生徒自ら自己管理能力を高める指導を継続し、「習慣化」の大切さを理解させる。	B	B	B	体調不良ということで、大事をとって欠席するという状況は、日常の生活にほぼ戻った後もその傾向は見られた。時間の管理に関しては、中には時間ギリギリに登校する姿も見られ、計画性をもって、先を見通して行動できるようになったかというと、リーダーとして活躍する生徒が出てきた中で、改善の途上にあると言える。1年次よりは、確実に成長はしているものの、次年度の進路実現の最終学年に向かうには、さらなる成長を遂げて欲しい。	A	・生徒の課題を的確に捉え、きめ細やかな指導を継続している点は評価できる。リーダー性の育成は難しい課題だが今後も取り組み続けてほしい。 ・リーダーの定義は「皆が行きたい方向へ言葉と行動で導く人」と言える。何事も一人では達成できず、いかに他の生徒をモチベートできるかであり、そのためにはリーダーがビジョンを持ち、伝えることである。本校での教育活動の中で、リーダーを育てようとする2学年団の努力を感じる。
		学校行事や学習において、実際に計画を立てさせることで、PDCAサイクルの大切さを理解させる。	B					
		先を見通した地道な努力の積み重ねが、学校生活を順調にさせる基盤で」あることをを生徒自身の自己評価・教員側からの評価（二者面談等で）実感させる。	B					
	創立40周年行事を通しての「本校への帰属意識」と「自己肯定感」の育成	周年行事に積極的姿勢で臨ませる中で、本校の伝統とそれを繋ぐ責務を実感させ、本校への帰属意識と誇りを育成する。	A	A		様々な周年行事に積極的に参加することで、本校への帰属意識と『チーム39期生』という意識は、今年度しっかりと育成できたのではないかと考える。この意識が、何事にも挑むこころざしと、自己肯定感、進路実現につながるように生徒一人一人の個性を大事に伸ばしていきたい。各部各課と連携・協力し、学年の内側からは見えない点も指摘してもらいながら、『チーム39期生』に社会で通用する人間力を培わせたい。		
		現在のありのままの自分を受け入れ、更に将来の展望に繋がるよう、進路学習・総合的な探究の時間の効果的な取組みを行う。	A					
		自分のしたいこと（希望進路）と自分ができること（知力・体力・精神力の伸長等）を把握できる力を育み、将来の目標を明確化させる。	B					
	学校生活や課外活動等を通して中堅学年として相応しい「生徒一人一人の多様な個性の伸長」と「チャレンジ精神」の育成	様々な活動に積極的に関わる姿勢を育成し、中堅学年として上級生を支え、下級生を導くよう学校生活の活性化に貢献できるように育成する。	A	B		3年生の先輩方の姿に憧れ、様々な学校行事に積極的にリーダーのポジションを希望してくれたことは非常に嬉しく頼もしく感じた。但し、リーダーになれば、リーダー性が育つのではないので、教員側で折に触れ、研修会や、学年集会、HRなどを通して育成しなければならない。今年度も実施はしたが、十分であったとは言い難い。確実に自覚と責任感は育ってはいるものの、発信力はまだまだである。これからも継続指導していきたい。		
		学校行事の中で、リーダー性が育つよう、生徒自ら企画・運営に貢献し、それが「自己肯定感」と「将来の展望」に繋がるよう導く。	B					
		生徒の良い面を引き出し、褒めることで生徒の長所を更に伸ばし、「ポジティブ思考」と「チャレンジ精神」を培わせる。	B					
第3学年	行事や学習、部活動に対して自ら積極的に挑戦・探究する態度の育成	大運動会や三国が丘祭等の学校行事にリーダーとして積極的に参加し、会議や意見交換を繰り返しながら、物事を実現可能な段階に引き上げるための思考力・判断力を養う。	A	B	B	大運動会や三国が丘祭においては最上級生としてリーダーシップを発揮し、40周年行事を盛り上げることができた。但し、もともとのリーダー的な資質が高かった生徒に頼ってしまう場面も多く、自分の好きなことは盛り上がるが、影での作業には二の足を踏む生徒も多く、それらの生徒を巻き込んでいくことは完全にはできなかった。生徒の勢いを殺さずに細かい点まで気を配り実行することのできるリーダーを育てていく技術を教員側も身に付ける必要がある。	A	・令和5年度の様々な40周年記念行事が、生徒の主体的な活動となったのは、3年生が個別・総合的に発揮したリーダーシップによるところが大きく、評価できる。 ・リーダーには「必ず実現できると考える、実現するまでやり続ける」という大変な決意と努力が必要であり、またそれができるからリーダーである。そのためには「今日一日だけでいい、精一杯やる」ことの積み重ねである。今この時の集中がいつのまにか習慣になることを生徒に体得させてほしい。 ・人前で自分の思いを伝えることの難しさを教員がしっかり理解しながら、各自のプレゼンテーション能力の向上を支援してほしい。
		授業で学習した内容を深く掘り下げてその意味や意義を追求し、教員との対話や生徒同士の対話、 各生徒が集団の前で話す機会を多く設けることで、自分の言葉で表現できる力を身に付けさせる。	B					
		部活動やその他の運動の機会において常に新しい目標を設定し、その目標を実現するための方策を自ら考えることにより、どの場面においても自らの資質・体力・技術力の向上を図る。	B					
	先見性があり、様々な社会の変化に対応しながら行動できる人材育成	学校行事や受験勉強等あらゆる場面で与えられたことだけでなく、新たなことを提案し試行錯誤する中で社会の変化への対応力を養う。	B	B		推薦入試や総合型選抜で上級学校を受験した際に、プレゼンテーション能力を要求される場面が多々あったが、これによく対応し、自分で材料を集めてまとめあげ、結果を出すことができた生徒も多かった。特に、1、2年生で取り組んだ総合的な探究の時間は一つの形として生徒たちの中に残っており、それを応用する形で入試にも立ち向かっていた。英語を使った論文や面接等の入試にも恐れず挑戦できたのも3年間の積み重ねだと思われる。		
		教員・生徒ともに時事や国際社会における正確な情報収集を行い幅広い知識を得ていくなかで、広い視野を持った人材を育成する。	B					
		英語を使う機会を日常の中で増やし、学んだ知識を活用して、コミュニケーションを図る中で、国際的な感覚を身に付けさせる。	A					
	主体的な考察・活動による進路選択と進路実現	大学進学、就職、就職後のことについて具体的なキャリアプランを持たせ、希望進路実現のための意識を明確化させる。	A	B		生徒と教員の二者面談の機会を確保し、生徒の志望に関しては細かくコミュニケーションを取ることができた。ただし、高い目標を持たせる指導に関しては、3年生からでは遅きに失した感がある。生徒が志望を固める前の段階でそれぞれの生徒に応じた進路を提示する必要がある。その打ち合わせの中で、教員の進路指導力を向上させることも期待できる。		
		進路希望調査をもとに生徒の進路目標を検討し、目標を高く設定してチャレンジすること意識させ、最後まで諦めない姿勢で臨ませる。	B					
		生徒にとってよりよい進路を見出すため、教員間で常時、大学や企業の情報を更新・共有する。	B					

保健環境	自ら正しい知識を身に付け、工夫しながら健康的な生活を実践できる生徒の育成	生徒保健委員会を中心に、健康的な生活を送るための方法や感染症の予防対策法等について生徒が主体的に調査し、保健だよりを通して情報発信を行う。	A	B	A	新型コロナウイルス感染症が「5類感染症」に位置付けられてから、学校としての感染対策が緩和され、それに伴い感染者が増加する時期もあった。保健委員を中心に、マスクの着用や換気、消毒について、生徒主体で呼びかける等、策を講じていきたい。また、各教室の空気清浄機やCO2モニターを稼働し、折を見て換気を行わせる等、教員自身が生徒の模範となるよう、普段の授業時から感染対策を意識して行動する必要がある。	A	・職員で連携を図りながら、生徒一人一人を大切に支援していく取組は評価できる。 ・考査最終日の清掃活動等の工夫がよくなされている。 ・新型コロナウイルス感染症の流行時にまったく異なった学校生活を強いられてきた生徒達の今後のメンタル面のサポートをよろしくお願いしたい。
		普段の授業や学校行事等あらゆる場面を通して、集団全体の健康維持に向けて、個人として努めるべきことは何か考えさせる機会を設ける。	B					
		教員自身が生徒の模範となるよう、健康維持に必要な情報を得るための研修を実施する。	B					
	相互扶助の精神のもと、美化活動を通して地域社会に貢献できる生徒の育成	生徒環境委員会を中心に、清掃活動の課題を見出し、校内外の美化推進運動を実施する。	B	A		考査最終日の大掃除は今年度からの取り組みであったが、学習環境を整える上で有意義な時間であった。今年度はトイレの清掃状況が課題だったので、次年度は例えば、この大掃除の時にトイレを重点的に掃除し、環境委員に清掃状況を点検させ、結果を共有するという活動を行っていきたい。また、ごみ置き場での不燃物が適切に処理されていないという課題があるので、管理している環境委員を中心に、呼びかけ・整備をしていきたい。		
		考査最終日に30分程度の清掃活動時間を設け、清潔な学習環境を維持する。	A					
		年に3回美化コンクールを実施し、生徒の環境美化活動への意識の向上を図る。	A					
	自他を大切にし、尊重できる豊かな心の育成と充実した学校生活の確保	月に1回学校生活アンケートと教育相談委員会を実施し、教員間で生徒の情報を共有しながら、早期対応を図る	A	A		教育相談委員会は、これまで各分掌からの状況報告・共有が中心であったが、最近は複雑かつ切迫した問題を抱えている生徒も増えてきたので、しっかりと「相談」する場にしていきたい。そのためには、会議前に資料を配付し、予め疑問点や解決策を考えておく等の工夫をする。スクールカウンセラーやソーシャルワーカーの方々にご協力いただき、連携も取れているので、次年度はさらに研修等で職員全体に話していただく機会を設けたい。		
		心の相談を定期的に実施し、スクールカウンセラーの助言をもとに適切な支援を行う。	A					
		専門医やソーシャルワーカー等外部の専門家と、学年会や委員会との連携を図り、チームとして生徒全員の望ましい学校生活を確保する。	A					
研修図書	自らの手で未来を切り拓こうとする生徒を育成するための授業及びその改善の推進	「グローバル人材育成指定校」としてのこれまでの取組を深化させるために、EAS との連携を強化して英語イマージョン授業を実施する。	A	A	A	「グローバル人材育成指定校」としての取組では、EASとの綿密な打合せを通して、海外における授業の手法を取り入れた展開を実現し、教員・生徒双方にとって学びを深められるものとなった。授業改善に向けた取組ではテーマの設定等により、教員同士の学び合いを実現するための環境を整えた。しかし、相互授業参観については、期間内の参観が難しい状況があったため、実施の在り方を見直す必要がある。	A	・ICT活用等に関する職員研修を計画的に実施しており、意欲的に授業改善に取り組んでいる。 ・「グローバル人材育成強化校」としての取組を単なる研究指定と捉えず、積極的に学校活性化の柱としてきた点は評価できる。中学生にも本校の英語イマージョン授業は浸透している。
		授業改善を円滑に進めることができるよう、本校の教育課題等を踏まえたテーマを設定し、それに基づいた研究授業を実施する。	A					
		目指す生徒の育成に向けて教員同士の学び合いを促すために、相互授業参観をより充実させる。	B					
	学んだことを人生や社会に生かそうとする生徒を育てるための職員研修の充実	ICT 活用指導力の向上や観点別評価による指導の改善等、本年度の本校の重点目標達成に向けた職員研修を企画・立案する。	B	A		ICT活用に関する研修を3回、人権・同和教育に関する研修、生徒指導に関する研修を1回ずつ実施した。人権・同和教育、生徒指導に関する研修については外部講師による講義等を実施することで、様々な視点を得ることができた。周年行事の関係で研修の回数が例年と比べ少なかったため、最終的に観点別評価に関する研修が実施できなかった。評価の充実を図るためにも、次年度は計画的に実施したい。		
		充実した教育活動に向けて多様な視点をもつために、外部講師を招いての職員研修を実施する。	A					
		教員としての資質・能力の向上等を図り、その成果を生徒に還元できるよう、校外における研修の案内を積極的に行う。	A					
	「しなやかな心の力」を育む図書館利用・読書の推進	図書館利用の促進を図るために、図書委員会を中心とした情報発信を行う。	B	B		授業と連動した特設コーナーの設置や図書館終礼、ビブリオバトルの実施等により、読書の推進を図った。さらに、図書委員会の活動により生徒とともに充実させることを目指したが、新たな取組の実施には至っていない。生徒部との連携を強化して委員会活動をより充実させたい。また、探究的な学習等に向けた取組も不十分であった。図書館利用をOGRプロジェクトの計画に位置付ける等の取組を実施したい。		
		OGR プロジェクト等の探究的な学習の充実に向け、図書資料の拡充を行う。	B					
		図書館だよりの発行や、授業における図書館の活用を通して、学校全体の読書推進を促す。	A					

企画	生徒が自らの可能性を信じてチャレンジする教育活動の支援	行事予定や変更を早く提示することで、計画的な教育活動ができるようサポートする。	B	B	B	今年度は、創立40周年記念事業や新たに会議日を設定するなど例年とは異なることが多いため、行事予定を昨年度よりも早めに提示することができた。また行事における事前会議やアンケートを実施することができ、各行事の検討資料とすることができた。 「防災避難訓練」については、年度の早い時期に実施することができ、久しぶりに屋外への避難訓練を行うことができた。防災教育の一環として、分掌や教科と連携しながら、三年間を見通した計画を立てていきたい。	A	・創立40周年の様々な記念事業の中、校務の円滑に運営した点は大変評価できる。
		各行事で事前係会議、事後アンケートを実施し、よりよい行事づくりに努める。	B					
		防災教育の一環として、地域の災害・社会の特性の知識を備え、自然災害から身を守り、他の人々や地域の安全を協力して守る行動へ結びつく「防災避難訓練」を計画し実施する。	A					
	本校教育活動の理解や信頼と期待を高められる連携の強化	各学年・各分掌と連絡調整を密に行い、行事を通して生徒の主体性を育成する創意工夫を行う。	B	A		創立40周年記念事業の計画・実施（一般公開）は、本校の教育活動の理解を図る良い機会となった。またこれを機にPTA・同窓会とのよりよい協力体制づくりや活動のあり方について考えていきたい。PTA総会においては、年々保護者の参加者人数が減少しており工夫が必要であると感じた。		
		40周年記念事業やPTA総会等を通して、PTA・同窓会との協力体制を強化し本校教育活動の理解を図る。	A					
	校務の円滑な運営のための環境整備	職員が快適に働けるよう、設備環境やデータの整備に努める。	A	B		職員の基本情報については計画的に作成・管理することができた。また、各行事の記録や分掌のサポートにおいては、技術的にできることを少しずつではあるが増やしていきサポートしていった。設備環境においては、特に職員室内のフリースペースの確保、また作業しやすい状態を維持できるように職員に呼びかけるなど行ったが、まだまだ改善の余地があるので今後とも職員の声を聞きながら改善していきたい。		
		各行事の記録・管理を行うことで、生徒・各分掌の活動をサポートする。	B					
		様々な行事や催し物が効果的に行われるように外部団体と調整・情報収集を行う。	B					
		基本情報（職員名票・緊急連絡先等）の計画的な作成と管理を行う。	A					
広報	様々な広報ツールを利用した広報活動	生徒の意見を反映させ、本校の魅力が十分に伝わる学校案内パンフレットを作成する。	A	A	A	学校案内に卒業生の合格体験記や本校で過ごして良かったことなど、生徒の声を載せることができた。ホームページやインスタグラム、「小郡高校ニュース」は役割を見直し、それぞれの特性を生かしながら更新することができた。Youtubeにおいても学校紹介動画を更新し、チャンネルの管理を行った。	A	・ホームページ、インスタグラム、市の広報誌、地方新聞など、様々な広報ツールによって小郡高校の改革を見ることができた。 ・学習塾に訪問して、本校の教育活動を伝えている点は評価できる。
		ホームページ、インスタグラム、「小郡高校ニュース」のそれぞれの特性を活かし本校の教育活動をきめ細かに恒常的に発信する。	A					
		Youtubeを利用し、動画による幅広い広報活動を展開する。	B					
	本校の魅力が伝わる組織的な広報活動	進路相談事業や体験入学において、生徒主体の魅力あるプレゼンを実施する。	B	A		進路相談事業や体験入学において、プレゼンだけでなく個別相談ブースで生徒が説明する機会を設け、本校の魅力を生徒が直に伝えることができた。出前授業や学校説明会に出向き、本校の特色、取り組み、40周年記念行事や学校行事について発信することができた。		
		出前授業や学校説明会に積極的に出向き、本校の魅力を発信する。	A					
		40周年記念事業を通して本校の魅力を伝えるとともに本校教育活動への理解を図る。	A					
	効果的な広報活動のための情報収集	中学校訪問を通して本校の魅力を発信しながら生徒の情報交換を行い、中学校との連携を強める。	A	A		中学校訪問や学習塾の訪問を職員の協力・調整を行い積極的に実施することができた。生徒の情報交換や受験生の動向などを把握することで、効果的な広報活動につなげていきたい。今年度は学習塾での学校説明会にも出向き、本校に関心のある生徒を対象に本校の特色や取り組みを理解してもらうことができた。		
		学習塾の訪問を通して学習塾からの情報を収集し、受験生の動向を把握する。	A					
		新入生アンケートや2、3年生向け満足度アンケートを行い、広報活動のさらなる改善を行う。	B					

情報	クロームブックを主体的に活用する生徒の育成及び電子黒板や無線LANを活用した授業の定着	普通教室での電子黒板やクロームブックを活用した授業を円滑に行えるようICT支援員と連携してサポートを行う。	A	A	A	どの授業においても、日常的にクロームブックや電子黒板などを活用するようになった。今年度より、自動採点システムを導入しているので次年度からは今年度以上に活用し、定期考査や小テストの採点を効率よく行えるようにしたい。また、今年度は、オンライン授業を行う機会が減ったが、緊急事態時に円滑に活用できるように準備は怠らないようにする。	A	・ICTの効果的活用が図られている。これから各分野で情報共有のシステム化がますます進んでいく。学校現場でも活用が進むことを願う。 ・生徒が学校や家庭で、タブレット等をツールとして日常的に使いこなすことで、修理やメンテナンス作業も増えていると聞く。この点においても教員の生徒支援が適切になされていることを評価する。
		緊急事態時や災害時等や長期休業中の学習強化のためのオンライン学習の準備・推進を行う。	B					
		総合的な探究の時間や学校行事などでクロームブックの積極的な活用を推進する。	A					
	校務用ネットワークおよびICT機器の適切な管理	部屋の予約や職員間の連絡に、学校ポータルサイトの積極的に活用し、連絡の迅速化を図る。	A	A		クロームブックの台数が増加したことにより、昨年度より故障などのトラブルが多かった。次年度もクラス増によりさらに台数が増加するため、トラブルが起きても生徒の使用が円滑に行えるように対応する。また、今年度は校務用パソコンやパソコン室のパソコンの入れ替えが行われた。トラブルへの対応は迅速に行い、他のICT機器と同様に引き続き適切に管理していく。		
		校務用パソコンの保守については、県のサポートとの連携をとりトラブルに迅速に対応する。	A					
		タブレットやプロジェクタやUSBメモリ等の管理を確実に行う。	B					
	他の分掌や学年との連携	研修図書課と連携し、校内研修等でICTの活用についての研修を行う。	A	A		今年度は、研修図書課と連携して、自動採点システムの活用について研修を行うことができた。次年度も、校内研修や各種アンケートのICT化など、様々なものを推進することができるようICT支援員と協力する。また、配信システムの活用においては、各分掌や各学年が独自に活用できるように準備・使用ができる職員を配置し、様々な場面で円滑に活用できるようにする。		
		他の分掌と連携し、Classiやクロームブックを活用して各種アンケートなどのICT化を図る。	A					
		配信システムを学校行事や集会等で円滑に活用できるよう他の分掌や学年と連携を図る。	A					
事務	「Find your own way!」活動を支援する環境整備	新たな活動に対しては、積極的な提言を含んだ支援を行う。	B	A	A	事務室としては、「Find your own way!」活動に対し、指導方針や学習活動のシフトに対応できるICT等の支援や、新学習指導要領に従った教師用教科書・指導書の整備を行う。また、施設の改修については、エアコンの改修、屋上防水シートの張替、教室電灯のLED化、体育館の床研磨、及びテニスコートの整備を予算化するべく尽力する。	A	・時代の流れに沿った、環境に配慮した取組を評価する。 ・老朽化、経年劣化による改修等は多額の予算を伴うが、予算確保に尽力いただきたい。
		新学習指導要領の施行に伴い教務と情報共有を図り、必要な整備を行う。	A					
		開校後40年経過し施設の大規模改修期を迎えるため、基本構想を構築する。	A					
	「Find your own way!」事務室への意識向上	自校の生徒の変革を意識し、当校における取組方策を考える。	A	B		事務職員として社会の変革に伴う生徒活動の変化を意識するよう努める。ついては、生徒が地域貢献の意識を育み、防災意識を高めて地域の期待に応えるための、教育活動に協力していく。また、学校行事を含む教育活動全般において教職員と連携し、過去の経緯も鑑みながら新たな方策を発信していく。		
		過去の踏襲、指示待ちに陥ることなく、業務の改善を重ねていく。	B					
		担当業務に限らず情報収集能力を高め、自らが変化の起点となっていく。	B					
	財務会計業務の正確な遂行	財務監査、会計指導の指導事項に対し認識を共有する。	A	A		会計事務指導、定期監査等指導事項に対応するため、財務業務の定期的な報告、及び職員間の常態的な財務チェックを行う。また、業務規則改定ごとに職員の自己研修を実施する。なお、疑義の生じる事案が発生した場合は、直ちに規則を再確認し、事務職員間で共通理解を図る。		
		所要時間もコストと認識したうえで、迅速かつ正確な会計処理を目指す。	B					
		財務事務の内部統制が施行されるので、財務規則を再確認して事務処理を行う。	A					

自己評価及び学校関係者評価を踏まえた今後の改善策

・生徒の主体性を育むべく、「指導する」から「支援する」に転換した一年目であった。今後は学校行事等だけでなく授業や総合的な探究の時間、部活動などにおいて浸透させていく。
・令和6年度の総合的な探究の時間（OGRプロジェクト）では身近な探究テーマに基づいた活動を1年時から実施する。
・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを講師として職員研修を実施するなど、教員との情報共有と連携をさらに強化する。
・職員が「リーダー育成のためのスキル」を身に付けることも今後の職員研修の内容として検討する。

評価項目以外のものに関する意見

・食堂業者を探すことに苦慮したとのことであったが、今後飲食業等に従事している本校の卒業生に依頼することも一案として検討されたい。